

21-A. チョウ目・チョウ類

現地調査では、古内伊子・中山晶壹・酒井芳男・佐藤光一・多和田潤治・千葉衣子・千葉保昌・渡辺剛太郎・渡辺好子の各氏から御協力をいただいた。また、橋本説朗・川口正三・増淵余一の各氏からは多くの情報を御提供いただいた。心より感謝申し上げる。なお、得られた試料は全て、筆者が同定・確認した。

(1) チョウ目・チョウ類の生息状況

栃木県内からは「新・栃木県の蝶 (2000)」以降、ナガサキアゲハ (山中：2005)・オオモンシロチョウ (渡辺：2004)・ムラサキツバメ (高橋：2001)・キマダラモドキ (久保田・佐藤：2006) の4種が新たに確認された。また、「栃木県の蝶 (1975)」にはリュウキュウムラサキの記録 (小山市大行寺、1969年8月13日、1♀、稲葉博由) も記載されている。現在までに、迷チョウあるいは偶産種を含め、5科134種のチョウ類が記録されたことになる。

本調査では、文献記録を含め5科119種が確認された。このうち、文献記録のみの種が2科4種である (表VII-21-A-(1)-1)。この結果、西那須野・塩原地区からは栃木県産チョウ類のうち、約89%の生息が記録されたことになる。この数字は、県内各市町と比較してもかなり高いものであり、調査地内の豊かな自然環境を裏付ける結果となった。

当地は、冬季に乾燥が著しいものの夏季に高温多雨の日々が多い平野部から、夏季は冷涼で冬季に多雪と低温の続く山岳地まで擁している。それに伴って、植物相も非常に変化に富んでいる。このため、大半の種が幼生期に食植性を示すチョウ類の、多様性も豊かなのであろう。

しかし、確認種の中には既に絶滅してしまった可能性のある種、激減してしまったと判断される種も少なからず含まれている。この事実は今後の環境保全の観点から、十分配慮すべきである。

【表VII-21-A-(1)-1 チョウ目・チョウ類の科別種数一覧】

科名※	本調査地の生息種	調査確認	(文献記録のみ)
アゲハチョウ科	10	10	
シロチョウ科	10	10	
シジミチョウ科	37	36	(1)
タテハチョウ科	45	42	(3)
セセリチョウ科	17	17	
計 5科	119種	115種	(4)種

※科の分類と配列は矢田脩編 (2007) に準じた。近年、チョウ類の高次分類が進展し、新たな科の位置付けが確立された。従来、独立した科として扱われていたウラギンシジミチョウ科はシジミチョウ科の、テングチョウ・マダラチョウ・ジャノメチョウ科はタテハチョウ科の、それぞれ亜科とされた。

確認種の特徴を概観すると、第一に平野部・低山地の里山から山岳地まで、多くの「ミドリシジミ類」を豊産する点が挙げられる。このグループは、通称「ゼフィルス *Zephyrus*」と呼ばれるシジミチョウ科の一群で、日本国内には25種が生息している。栃木県内からは、1990年に新種記載されたカシワアカシジミ (キタアカシジミ) を含め、現在までに21種が記録された。この種数は県内産シジミチョウ科41種の半数以上に相当し、いかに優占した分類群かが分かる。調査地内からは、県内産21種の全てが確認されている。

栃木県内産ミドリシジミ類の生息地は、壮齢木を含んだある程度まとまった面積をもつ、落葉広葉樹林帯にほぼ限定されている。その植生を要約すると、平地ではコナラやクヌギを主体とした二次林 (いわゆる雑木林)、山岳地や溪谷地ではブナやミズナラを主体にヤマザクラ・マンサク・トチノキなどから構成される夏緑林、そして湿性地とその周辺に特有なハンノキ林がそれに該当する。

多くのミドリシジミ類が生息することは、当地に良好な樹林環境が温存されていることを示している。

次に大まかな標高区分と環境区分に沿って、各々のチョウ類相の概要を述べる。標高約 200～500 mにかけての範囲では、多くの暖地・寒地系種が混在して記録されている。

標高 240m前後の石林周辺には、シラカシ・アラカシ・シロダモ・クスノキなどの常緑広葉樹を含む樹林が局所的に生育している。その内外でジャコウアゲハ・アオスジアゲハ・ウラギンシジミ・ムラサキシジミ・ヒメアカタテハなど、暖地系の種が多く確認されている。

標高約 300～500m前後の区域では、平野部から山麓部・山地への移行帯を含み地形が複雑で、生育する植物類も非常に豊かである。生息に適した環境が温存されているため、確認されたチョウ類相は非常に多様で、変化に富んでいる。中でも、樹林と草地がモザイク状に点在する区域には、他の環境と比較して種類数が多い。ウスバシロチョウ・オナガアゲハ・ミヤマカラスアゲハ・ヒメシロチョウ（井口、1975年5月2日、多数確認他、山村剛）・ツマグロキチョウ・ヤマトスジグロシロチョウ・ミヤマカラスシジミ・コツバメ・ルリタテハ・ヒオドシチョウ・ウラギンスジヒョウモン・ウラギンヒョウモン・スミナガシ・ミスジチョウ・オオムラサキ・クロヒカゲ・コジャノメ・アオバセセリ・ミヤマセセリ・ギンイチモンジセセリ・ホソバセセリ・ホシチャバネセセリ（千本松、1989年7月27日、少数確認他、山村剛）・スジグロチャバネセセリ・ヘリグロチャバネセセリ・オオチャバネセセリなどが生息している。

また、アゲハ・クロアゲハ・キタキチョウ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・キタテハ・イチモンジチョウ・コムスジ・ヒメジャノメ・サトキマダラヒカゲ・ダイミョウセセリなど人家周辺や市街地に適応した種も多い。さらに近年では、県内北西部での分布拡大が著しいモンキアゲハ・ツマグロヒョウモンの個体数が増加している。

この区域に広く点在するコナラークヌギの二次林には、ウラゴマダラシジミ・ウラナミアカシジミ・ミズイロオナガシジミ・オオミドリシジミに代表される「平地性ミドリシジミ類」が記録されている。井口や千本松・折戸では、国内・県内ともに生息地が比較的限られ、個体数も少ないウラムスジシジミ・クロミドリシジミが多産する点は特筆される。また、井口（標高約 280m）では県内での分布下限の産地となる、メスアカミドリシジミも記録（1983年6月27日、1♂、山村 剛）されており、注目される。本種の幼虫は、ヤマザクラなど多くのサクラ類を食樹とする。

なお、千本松の標高約 320mの地点で、キバネセセリ・コキマダラセセリの2種を経年に渡って、複数個体ずつ確認（2007年7月11・17日、少数確認他、渡辺 剛）している。両種とも県内では概ね標高 500m以上に主要生息域を持つ種で、当地は現在での確実な分布下限の産地であり注目される。キバネセセリは、リョウブの花から吸蜜する個体の確認例が多い。

標高 500m以上の山地帯では、標高を増すごとにブナ類やミズナラ・カンバ類などの生育量が多くなる。また、局所的にカシワも生育している。それに伴って、いわゆる「山地性チョウ類」が、局地的ながら広く生息する。代表的な種類を列举すると、スジボソヤマキチョウ・ムモンアカシジミ・オナガシジミ・ウスイロオナガシジミ・アイノミドリシジミ・フジミドリシジミ・ハヤシミドリシジミ・エゾミドリシジミ・ジョウザンミドリシジミ・カラスシジミ・ヒメシジミ・エルタテハ・キベリタテハ・シータテハ・ギンボシヒョウモン・ウラジャノメ・ヒメキマダラヒカゲなどで、古く 1950年代頃から逆杉・新湯温泉・元湯温泉・大沼周辺で記録されている。

調査地内では、「山地性ミドリシジミ類」やウラジャノメを始め、主要生息域が標高 800～1,200 m前後の範囲にあるチョウ類が、さらに低標高の区域にも生息している。これは、山地性種の下降現象の例として注目され、当地のチョウ類相を強く特徴付けている。

文献記録のみの確認であるカシワアカシジミ・ヒョウモンチョウ・ホシミスジの3種も、この一帯から記録されている。

カシワアカシジミはカシワが幼虫の食樹で、1967年5月26日羽化の古い標本1個体により〔附〕として発表（「新・栃木県の蝶（2000）」）されたのが、県内唯一の記録である。成虫の形態・斑紋が本種と酷似するアカシジミとは、卵が10個以上の卵塊で産付され3齢から終齢の幼虫は気門周辺が

褐色を呈するなど、生態面や幼虫の形態に違いがあるとされる。

ヒョウモンチョウはワレモコウ類が幼虫の食草で、戦場ヶ原や小田代原など日光市の山地草原には多産することが知られているが、それ以外の地では局地的に希産する程度である。調査地内での近年の確認記録はない。

ホシミスジはシモツケなどシモツケ属の低木が幼虫の食樹で、隣接する那須町の山地帯には広く分布するものの、調査地内における確認例は極めて少ない。調査地内にはシモツケ属の自生地が少ないことから、確認された個体は民家の庭園や街路沿いに観賞用に植栽された食樹に由来する、一過性的な発生による可能性もあると推測される。

河川沿いにも、特徴のあるチョウ類相が見られる。箒川・蛇尾川の本流及び支川沿いの渓谷地では、() 内に示す食草・食樹の分布に対応しウラクロシジミ (マンサク)・スギタニルリシジミ (トチノキ)・ツマジロウラジャノメ (ヒメノガリヤス)・コムラサキ (ヤナギ類) などが生息し、オオヒカゲ (カサスゲ) も局地的に生息する。

箒川沿いでは県内での記録が少ない、コムラサキの黒色型が記録 (中塩原, 1993年7月17日, 1♂, 山村 剛) されている。蛇尾川流域の一部ではミヤマシジミ (コマツナギ) が記録 (1996年9月18日, 1♂1♀, 橋本説朗) されており、分布上特筆される。

絶滅あるいは減少種が目立つ土着種の中で、ウスバシロチョウは生息地が増加しており、局地的には個体数も非常に多くなってきた。県内では従来北西部の低山地から山地に偏在していた分布が、南東部へと明らかに拡大している。これは、幼虫の食草であるムラサキケマンが、人為的に生じた荒廃生態系に進入した結果であろう。事実、調査地内及び周辺地域でも10数年前から創出され始めた造成地や宅地周辺の二次草地、車道沿いなどにおいて、新たな産地が少なからず確認 (渡辺:2001、2005) されている。

近年では地球温暖化に伴い、暖地系種の北上傾向が目立つ。モンキアゲハは西那須野地区を中心に少ないながら春型個体も毎年記録されるようになり、越冬蛹も複数確認していることから土着したものと判断される。ツマグロヒョウモンは越冬の事例確認はないが、ここ1、2年の間には非常に確認例が増加し、高標高地の大沼湖畔でも確認 (2009年7月14日, 1♀, 酒井芳男) された。今後、経年発生する可能性もあり、注視していく必要がある。ムラサキツバメは小山市や宇都宮市、大田原市で記録されているが、調査地内へ分布を拡大する可能性も非常に高い。

ウラナミシジミ・アサギマダラ・ヒメアカタテハ・チャバネセセリ・イチモンジセセリの5種は、概ね夏～秋季に越冬地から調査地内へ北上してきた個体かその子孫であり、当地においては土着しないものと判断される。オオモンシロチョウ (千本松, 2003年10月4日, 1♂, 渡辺 剛)、ウスイロコノマチョウ (三島, 2004年10月3日, 1♂, 渡辺 剛)、そして文献記録 (高橋:2003) のみのクロコノマチョウ (金沢木沢林道, 1999年7月19日, 1ex, 高橋光雄) は明らかな迷チョウないし偶産種である。

(2) 保全すべき種

チョウ類は、トンボ類と共に昆虫類の中では生態の解明が進んでいる分類群であり、目視でも種の同定が比較的容易である。このため、環境指標として優れており、ここでは21種を選定した。しかし、栃木県内の分布状況を勘案すると西那須野・塩原地区に生息するチョウ類には、他にも「保全すべき種」に相当する種が確認されている。この点には十分留意していただきたい。なお、各種の国内分布や生態などの解説の一部は矢田脩編 (2007) に拠った。

また、「環境省レッドリスト (2007)」及び「レッドデータブックとちぎ (2005)」で選定されている種類は、種名のあとにカテゴリーを示した。

①ヒメシロチョウ (シロチョウ科) 環境省：絶滅危惧Ⅱ類、栃木県：絶滅危惧Ⅰ類

北海道、本州、九州に分布する。幼虫の食草はツルフジバカマ・レンリソウなどが知られているが、井口の生息地ではカラスノエンドウが確認されている。年3回の発生で、春型が4～5月、夏型

が6~7月と8~9月に出現し、蛹で越冬する。草上を弱く低く飛び、各種の草本類で吸蜜する。近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、西那須野地区の井口で比較的個体数の多い生息地が確認され、東赤田でも記録された。しかし、いずれの生息地も道路拡張工事により植生が破壊され、1977年5月1日の井口（多数確認、山村剛）での記録を最後に、現在では絶滅したと判断される。本種はごく狭い範囲に群棲する傾向が強いため、未確認の生息地が温存されている可能性も捨てきれない。新たな確認が成された際には、早急に保護対策を講ずる必要がある。

②ツマグロキチョウ（シロチョウ科） 環境省：絶滅危惧Ⅱ類、栃木県：要注目

本州、四国、九州、奄美大島に分布する。幼虫の食草はカワラケツメイのみ。年3~4回の発生で、夏型は6月から秋型は9月から出現し、成虫で越冬する。草上を低く飛び回り、各種の草本類で吸蜜すると共に、湿性地で吸水する。草地環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、平野部や丘陵部から低山地にかけて、局地的ながら広く生息している。しかし、生息地の多くは農地や造成後放置された荒地などに生じた不安定な草地環境であり、各種開発で改変されてしまう可能性が高く楽観視することはできない。

③ムモンアカシジミ（シジミチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

北海道（含：奥尻島）、本州に分布する。幼虫は半食肉性で、3齢幼虫からは植物の葉以外にアブラムシ・カイガラムシ類を大量に捕食し始め、終齢幼虫では葉をほとんど摂食しない。年1回の発生で、7月中旬~8月中旬に出現し、卵で越冬する。低山地のコナラ・クヌギの二次林や山地の夏緑林に生息し、♂は正午以降から午後3:00頃を中心に、樹上をやや活発に飛び回る。その特異な生態から全国的にも生息地は局限される。

調査地内では、山地帯に局地的に分布し、西那須野地区からも確認されている。塩原地区の山地では生息は維持しているものの、発生個体数が減少している。井口（1974年8月4日※、1♂、山村剛）・東赤田（1973年7月22日、1♂、山村剛）は、標高約280mの平野部で県内最下限の生息地として、また、山地の生息地と比較して羽化が7月中旬からと非常に早いことから注目されていた。しかし、道路拡張工事以降は個体群の衰退が目立ち、1986年以降絶滅状態である。今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

※渡辺（2005）では1975年となっているが、1974年が正しい。ここに記して、深くお詫び申し上げます。

④カシワアカシジミ（キタアカシジミ）（シジミチョウ科） 環境省：絶滅危惧Ⅱ類、栃木県：情報不足

北海道、本州（東北地方と広島県）に分布する。幼虫の食樹はカシワで、卵で越冬する。年1回の発生で、7月上旬から出現するものと考えられる。卵は10個以上の卵塊で産付され、3~終齢幼虫は気門周辺が褐色を呈するとされる。♂は午後3:00頃から樹上を飛び回るといふ。

調査地内では、塩原地区の八郎ヶ原牧場で得られた、1個体の古い標本により記録されている。今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

⑤ウラミスジシジミ（シジミチョウ科） 環境省：一、栃木県：要注目

北海道、本州、四国、九州に分布するが、全国的にも生息地は局所的で個体数は少ないとされる。年1回の発生で、6月中旬~7月中旬に出現し、幼虫の食樹はコナラ・クヌギ・ミズナラ・カシワなどで、卵で越冬する。♂は午後3:00以降から夕方を中心に樹上をやや活発に飛び回り、クリの花を好んで吸蜜する。

栃木県内では、古くから山地に生息する、希少種と考えられていた。しかし、近年になって那須野が原の平野部にも局地的ながら広く分布し、しかも個体数も多いことが判明し注目されている。

井口の生息地は道路拡張工事や工業団地の造成により、生息に適したコナラークヌギ二次林が急速に失われている。今後さらなる改変が加えられれば、局所的な消滅も危惧される。早急に保護対策を講ずる必要がある。

⑥ミドリシジミ（シジミチョウ科） 環境省：一、栃木県：要注目

北海道（含：利尻島、礼文島、焼尻島など）、本州、四国、九州に分布する。年1回の発生で、6月中旬～7月下旬に出現する。幼虫の食樹は平地ではハンノキ、山地ではヤマハンノキで、卵で越冬する。♂は午後4：00以降から夕方を中心に、樹上を非常に活発に飛び回る。

調査地内では、山地でヤマハンノキを食樹にしている個体群は、安定して発生している。しかし、平野部ではハンノキ林を伴う湿性地が開発により失われ、そこに依存する本種も激減している。残存しているハンノキ林の保護対策を講ずることが必要である。

⑦クロミドリシジミ（シジミチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

本州、九州に分布する。年1回の発生で、6月中旬～7月中旬に出現する。幼虫の食樹はクヌギで、壮齢木の密度が高い樹林に限って生息し、卵で越冬する。♂は早朝4：00～5：00頃と夕方午後4：00以降を中心とした2回、樹上を非常に活発に飛び回る。クリの花を好んで吸蜜し、葉上の露を吸水することもある。

以前は那須町のクヌギ林に限って生息する希少種と考えられていたが、近年になって那須野が原の平野部にも局地的ながら広く分布し、個体数も多いことが判明し注目されている。しかし、井口の生息地はウラミスジシジミの項で前述したように急速に樹林が失われている。今後、早急に保護対策を講ずる必要がある。

⑧ミヤマカラスシジミ（シジミチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

北海道、本州、四国、九州に分布する日本特産種。年1回の発生で、7月中旬～8月上旬に出現する。幼虫の食樹はクロウメモドキで、特に幼果を好んで摂食し、卵で越冬する。♂は正午以降から午後3：00頃を中心に、樹上を活発に飛び回る。

調査地内のうち、塩原地区の山地に生息する個体群は、個体数は少ないものの安定して発生している。しかし、平野部では井口のみが生息し、その発生地は小面積の樹林に局限されている。これは食樹クロウメモドキの生育環境が、湿性地に偏在するためである。西那須野・塩原地区の平野部には湿性地自体が乏しく、乾燥した林内ではクロウメモドキは群生することではなく、単生個体が散見される程度である。以上の点から、食樹の本数がまとまって見られる井口は、保全上特筆される生息地と判断される。当地のコナラークヌギ二次林は、ウラミスジシジミの項で前述したように調査地内の平野部では極めて重要な地域であるが、急速に樹林が失われており今後早急に保護対策を講ずる必要がある。

⑨クロシジミ（シジミチョウ科） 環境省：絶滅危惧Ⅰ類、栃木県：絶滅危惧Ⅰ類

本州（含：隠岐）、四国、九州（含：対馬）に分布する。年1回の発生で、7月上旬～下旬に出現する。幼虫は食肉性で、孵化直後からアブラムシ類の分泌する甘露を摂食し、3齢幼虫以降はクロオオアリの巢中でアリから餌を与えられて成長するとされる。また、幼虫はアリの巢中で越冬するとされる。♂は活発に樹上や林縁を飛ぶが、♀の行動は不活発である。本種の主要な生息域は、開発の著しい平野部から低山地の里山環境にある。さらに、幼虫期には特殊な生態を示すことから、わずかな環境変化でも生息への影響を受けてしまう。このため、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、唯一記録のある下永田のコナラークヌギ林に、比較的まとまって生息していた。しかし、宅地開発のため生息地の植生が破壊され絶滅した。身近な環境に生息することが多く、未確認の生息地が温存されている可能性も捨てきれない。新たな確認が成された場合には、早急に保

護対策を講ずる必要がある。

⑩ヒメシジミ（シジミチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：要注目

北海道（含：利尻島、焼尻島、天売島など）、本州、九州に分布する。年1回の発生で、6月中旬～7月中旬に出現する。幼虫の食草はマメ・タデ・バラ・ヤナギ科などの草・木本類で、多岐に渡るとされる。卵で越冬する。草上を低く飛び回り、各種の草本類で吸蜜し湿性地から吸水する。草地環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、標高約500m以上の低山地から山地に、局地的ながら広く分布する。しかし、多産する生息地はない。当該地でも、草地の自然遷移や開発に伴い減少する可能性が高く、今後とも生息状況を把握していく必要がある。

⑪ミヤマシジミ（シジミチョウ科） 環境省：絶滅危惧Ⅱ類、栃木県：準絶滅危惧

本州のみに分布する。年3～4回の発生で、5月中旬～10月上旬に出現する。幼虫の食草はコマツナギで、特に花や蕾を好んで摂食し、卵で越冬する。食草の分布との係わりから、河川沿いの草地に生息する例が多い。成虫は、草上を低く飛び回り、各種の草本類で吸蜜し湿性地から吸水する。河辺草地の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、東遅沢と関根の蛇尾川沿いで、1996年9月18日に橋本説郎により生息が確認されたのが唯一の記録である。しかし、翌1997年の豪雨災害の際に、土砂の流入によって食草が埋没し、1998年以降は生息を確認していないとの情報を得た（橋本私信）。今後、早急に蛇尾川及び箒川沿いの生息状況を把握し、保護対策を講ずる必要がある。

⑫ヒョウモンチョウ（タテハチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：要注目

本種は北海道、本州に分布する。年1回の発生で、7月上旬～下旬に出現する。幼虫の食草はワレモコウ・ナガボノシロワレモコウで、通常幼虫で越冬するが卵での越冬例もあるとされる。草上を低く比較的ゆったりと飛び回り、各種の草本類で吸蜜する。食草の分布との係わりから乾燥気味の草地に生息するが、草地環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、古くから塩原地区の山地帯から生息が知られているが、記録は散発的で個体数も少ない。今回の現地調査では確認されなかった。今後、早急に塩原地区山地帯の生息状況を把握し、保護対策を講ずる必要がある。

⑬ウラギンスジヒョウモン（タテハチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：準絶滅危惧

北海道、本州（含：隠岐）、四国、九州（含：対馬、五島）に分布する。年1回の発生で、6月下旬～7月中旬に出現する。幼虫の食草は各種のスミレ類で、1齢幼虫あるいは卵で越冬するとされる。草上を低く比較的ゆったりと飛び回り、各種の草本類で吸蜜する。また、湿生地で吸水する。里山では人家周辺の草地にも生息するが、草地環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、平地から低山地にかけて広く分布し、1990年代初めまでは比較的多くの個体を確認できた。しかし、近年は個体数が著しく減少している。今後、早急に生息状況を把握し、保護対策を講ずる必要がある。

⑭オオムラサキ（タテハチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：要注目

本種は北海道、本州、四国、九州に分布する。国蝶に指定され、切手にも図案化されている。年1回の発生で、6月下旬～7月下旬に出現する。幼虫の食樹はエノキ・エゾエノキで、通常3齢幼虫で越冬する。成虫は樹液を好んで吸汁し、♂は夕刻に特定の樹冠で占有行動をとる。里山の樹林環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、主に食樹を伴った平地から低山地のコナラークヌギ林、溪畔林に主要生息域がある。しかし、市街地周辺では二次林の衰退・減少に伴って、生息地・発生個体数ともに減少している。今後、早急に生息状況を把握し、保護対策を講ずる必要がある。

⑮ウラジャノメ（タテハチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

北海道（含：利尻島）、本州に分布する。幼虫の食草は、中塩原でヒメノガリヤスを確認している。他にイネ・カヤツリグサ科の草本を利用するとされる。年1回の発生で、6月中旬～7月中旬に出現し、3～4齢幼虫で越冬する。樹林と接する草上を低く飛び、好んで湿った地上で吸水する。

調査地内では、標高800m以上の山地には局地的ながら広く分布するが、黒磯地区の沼原のような多産地はない。箒川・蛇尾川に沿った標高約500m付近は、県内最下限の生息地であるが、個体数は非常に少ない。今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

⑯ツマジロウラジャノメ（タテハチョウ科） 環境省：一、栃木県：一

北海道、本州、四国に分布する。幼虫の食草は、藁沼でヒメノガリヤスを確認している。他にイネ・カヤツリグサ科の草本を利用するとされる。年3回の発生で、春型が5～6月、夏型が7月と8～9月に出現し、4齢幼虫で越冬する。フワフワとやや早く飛び、各種の草本類で吸蜜する。溪谷に沿った、食草の生育密度が高い露岩地に生息することから、分布は局地的傾向が強く個体数も一般に少ない。

調査地内では、近年になって良好な生息地が岩盤崩落防止のためコンクリートを吹き付けられたり、金属製のネットで被われたりしたことから生息地、個体数ともに減少傾向にある。特に、蛇尾川に沿った標高約500m付近はダムの造成工事に伴い、その傾向が顕著である。ここは、県内最下限の生息地で発生個体数も非常に多かったが、1980年代と比較し激減している。今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

⑰オオヒカゲ（タテハチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

北海道、本州に分布する。年1回の発生で、6月下旬～7月中旬に出現する。幼虫の食草は石林や下大貫ではカサスゲが確認されている。他にイネ・カヤツリグサ科の草本を利用するとされる。2～3齢幼虫で越冬する。成虫は林床をフワフワと飛び、好んで樹液や腐果で吸汁するが、人の気配には敏感である。

調査地内では広く分布するが、その発生地は小面積の区域に局限されている。これはカサスゲなど食草の生育環境が、湿性に局限されるためである。調査地内には湿性地自体が乏しい点から、今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

⑱ギンイチモンジセセリ（セセリチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：要注目

北海道、本州、四国、九州に分布する。幼虫の食草は、井口でススキを確認している。他のイネ科草本も利用するとされる。平地から低山地では年2回の発生で春型は4月下旬～5月に、夏型は7～8月に出現するが、高標高地では5月下旬～6月に年1回春型が発生する。幼虫で越冬する。草上を低くゆっくりと飛び回り、各種の草本類で吸蜜すると共に、湿性地で吸水する。草地環境の衰退・減少から、近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、平野部や丘陵部から低山地・山地にかけて、局地的ながら広く生息している。しかし、一部の自然草地をのぞき、生息地の多くは農地や造成後放置された荒地などに生じた不安定な草地環境であり、楽観視することはできない。

⑲ホソバセセリ（セセリチョウ科） 環境省：一、栃木県：準絶滅危惧

本州、四国、九州に分布する暖地系種。幼虫の食草は、井口でススキを確認している。他のイネ科草本も利用するとされる。年1回の発生で、7月上旬から下旬に出現し、幼虫で越冬する。草上

を飛ぶがすぐ葉上に静止し、各種の草本類で吸蜜すると共に、湿性地で吸水する。近年県内各地で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、平野部や丘陵部・低山地にかけて局地的に生息していたが、個体数は明らかに減少している。今後早急に分布状況や生態についての綿密な調査が必要である。

㊸ホシチャバネセセリ（セセリチョウ科） 環境省：絶滅危惧Ⅰ類、栃木県：絶滅危惧Ⅱ類

本州、対馬に分布する。幼虫の食草は、千本松でオオアブラススキを確認している。年1回の発生で、7月下旬から8月中旬に出現し、3齢幼虫で越冬する。草上を素早く飛び回り、各種の草本類で吸蜜する。近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、千本松地区で比較的個体数の多い生息地が確認された。しかし、ゴルフ場の造成工事により植生が破壊され、1989年8月22日の記録（少数確認、山村剛）を最後に現在では絶滅状態である。本種はごく狭い範囲に群棲する傾向が強いため、未確認の生息地が温存されている可能性も捨てきれない。新たな確認が成された際には、早急に保護対策を講ずる必要がある。

㊹スジグロチャバネセセリ（セセリチョウ科） 環境省：準絶滅危惧、栃木県：要注目

本種は北海道、本州、九州に分布する。幼虫の食草は、千本松と蕨沼でヒメノガリヤスを確認している。年1回の発生で、7月中旬から8月上旬に出現し、初齢幼虫で越冬する。草上を低く飛び、各種の草本類で吸蜜する。近年全国的規模で減少しており、絶滅が危惧されている。

調査地内では、比較的個体数の多い生息地が、局地的に確認されている。しかし、生息地の多くは開発されやすい里山の林縁草地環境であり、楽観視することはできない。

（3）注目すべき種

注目すべき種は選定しなかったが、それに相当すると判断される種については、生息状況の項で概要を述べた。

（文責：渡辺 剛）

【目録】

※科の分類、科・種の配列、和名・学名は、矢田監修（2007）に準じた。

※生息確認種と生息エリアは、今回の現地調査結果及び那須野が原博物館所蔵の標本に基づいた。

※筆者らが未確認の種については、文献記録から引用した。

※高橋（2003）はオオゴマシジミの生息地として、鶏頂山からの記録を塩原町管内（現、那須塩原市）として引用している。しかし、当地は藤原町（現、日光市）に含まれる。このため、ここでは除外した。

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
チョウ目・チョウ類						
アゲハチョウ科	ウスバシロチョウ（ウスバアゲハ）	<i>Parnassius citrinarius citrinarius</i> Motschulsky		○	○	○
	ジャコウアゲハ	<i>Byasa alcinous alcinous</i> (Klug)	○			
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i> (Fruhstorfer)	○	○		
	アゲハ	<i>Papilio xuthus xuthus</i> Linnaeus	○	○	○	
	キアゲハ	<i>Papilio machaon hippocrates</i> C. & R. Felder	○	○	○	○
	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i> Butler		○	○	
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor demetrius</i> Stoll	○	○	○	
	オナガアゲハ	<i>Papilio macilentus macilentus</i> Janson	○	○	○	○
	カラスアゲハ	<i>Papilio dehaanii dehaanii</i> C. & R. Felder	○	○	○	○
	ミヤマカラスアゲハ	<i>Papilio maackii maackii</i> Ménétrières		○	○	○
シロチョウ科	ヒメシロチョウ	<i>Leptidea amurensis amurensis</i> (Ménétrières)		○		
	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	○	○	○	
	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina mandarina</i> (de l'Orza)	○	○	○	○
	スジボソヤマキチョウ	<i>Gonepteryx aspasia nipponica</i> Bollow			○	○
	モンキチョウ	<i>Colias erate poliographus</i> Motschulsky	○	○	○	○
	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus scolymus</i> Butler	○	○	○	○

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
(シロチョウ科)	オオモンシロチョウ	<i>Pieris brassicae brassicae</i> (Linnaeus)			○	
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i> Boisduval	○	○	○	○
	ヤマトスジグロシロチョウ	<i>Pieris nenis japonica</i> Shirôzu	○	○	○	○
	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete melete</i> (Ménétrières)	○	○	○	○
シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i> de Nicéville	○	○	○	
	ゴイシシジミ	<i>Taraka hamada hamada</i> (H. Druce)	○	○	○	○
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas daimio</i> (Matsumura)	○	○	○	○
	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica japonica</i> (Murray)	○	○		
	ムモンアカシジミ	<i>Shirozua jonasi jonasi</i> (Janson)		○	○	○
	ウラゴマダラシジミ	<i>Artopoetes pryeri</i> (Murray)	○	○	○	○
	ウラキンシジミ	<i>Ussuriana stygiana</i> (Butler)			○	○
	ウラナミアカシジミ	<i>Japonica saepestriata saepestriata</i> (Hewitson)	○	○	○	
	アカシジミ	<i>Japonica lutea lutea</i> (Hewitson)	○	○	○	○
	カシワアカシジミ (キ タアカシジミ)	<i>Japonica onoi onoi</i> Murayama				□*1
	オナガシジミ	<i>Araragi enthea enthea</i> (Janson)			○	
	ミズイロオナガシジミ	<i>Antigius attilia attilia</i> (Bremer)	○	○	○	○
	ウスイロオナガシジミ	<i>Antigius butleri butleri</i> (Fenton)				○
	ウラミスジシジミ	<i>Wagimo signatus signatus</i> (Butler)	○	○	○	○
	ウラクロシジミ	<i>Iratsume orsedice orsedice</i> (Butler)	○			○
	ミドリシジミ	<i>Neozephyrus japonicus japonicus</i> (Murray)	○			○
	アイノミドリシジミ	<i>Chrysozephyrus brilliantinus brilliantinus</i> (Staudinger)				○
	メスアカミドリシジミ	<i>Chrysozephyrus smaragdinus smaragdinus</i> (Bremer)		○		○

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
(シジミチョウ科)	フジミドリシジミ	<i>Sibatanozephyrus fujisanus</i> (Matsumura)			○	○
	ハヤシミドリシジミ	<i>Favonius ultramarines</i> <i>ultramarines</i> (Fixsen)		○		○
	エゾミドリシジミ	<i>Favonius jezoensis</i> (Matsumura)				○
	オオミドリシジミ	<i>Favonius orientalis</i> (Murray)	○	○	○	○
	クロミドリシジミ	<i>Favonius yuasai yuasai</i> Shirôzu		○	○	
	ジョウザンミドリシジミ	<i>Favonius taxila taxila</i> (Bremer)				○
	ウラジロミドリシジミ	<i>Favonius saphirinus</i> <i>saphirinus</i> (Staudinger)				○
	カラスシジミ	<i>Fixsenia w-album fentoni</i> (Butler)				○
	ミヤマカラスシジミ	<i>Fixsenia mera</i> (Janson)		○		○
	コツバメ	<i>Ahlbergia ferrea</i> (Butler)	○	○	○	○
	トラフシジミ	<i>Rapala arata arata</i> (Bremer)	○	○	○	○
	クロシジミ	<i>Niphanda fusca fusca</i> (Bremer & Grey)	○			
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus boeticus</i> (Fabricius)	○	○	○	
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i> (Ménétrières)	○	○	○	○
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades argiades</i> (Pallas)	○	○	○	○
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus ladonides</i> (de l'Orza)	○	○	○	○
	スギタニルリシジミ	<i>Celastrina sugitanii sugitanii</i> (Matsumura)				○
	ヒメシジミ	<i>Plebejus argus micrargus</i> (Butler)				○
	ミヤマシジミ	<i>Lycaeides argyrognomon</i> <i>praeterinsularis</i> Verity	○			
	タテハチョウ科	テングチョウ	<i>Libythea lepita celtoides</i> Fruhstorfer	○	○	○
アサギマダラ		<i>Parantica sita nipponica</i> (Moore)			○	○
サカハチチョウ		<i>Araschnia burejana strigosa</i> Butler	○		○	○
クジャクチョウ		<i>Inachis io geisha</i> (Stichel)			○	○

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
(タテハチョウ科)	ヒメアカタテハ	<i>Vanessa cardui</i> (Linnaeus)	○	○	○	○
	アカタテハ	<i>Vanessa indica indica</i> (Herbst)	○	○	○	○
	ルリタテハ	<i>Kaniska canace nojaponicum</i> (von Siebold)	○	○	○	○
	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i> (Stichel)	○	○	○	○
	エルタテハ	<i>Nymphalis l-album samurai</i> (Fruhstorfer)				○
	キベリタテハ	<i>Nymphalis antiopa asopos</i> (Fruhstorfer)				○
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i> (Linnaeus)	○	○	○	○
	シータテハ	<i>Polygonia c-album hamigera</i> (Butler)			○	○
	ヒョウモンチョウ	<i>Brenthis daphne rabdia</i> (Butler)				□ *1,3,4
	ウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome laodice japonica</i> (Ménétrières)	○	○	○	
	オオウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome ruzsana</i> (Motschulsky)	○	○	○	○
	クモガタヒョウモン	<i>Nephargynnis anadyomene midas</i> (Butler)	○	○	○	○
	メスグロヒョウモン	<i>Damora sagana liane</i> (Fruhstorfer)	○	○	○	○
	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia tsushimana</i> Fruhstorfer		○	○	○
	ギンボシヒョウモン	<i>Speyeria aglaja fortuna</i> (Janson)				○
	ウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana adippe pallescens</i> (Butler)	○	○	○	○
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i> (Linnaeus)		○	○	○
	スミナガシ	<i>Dichorragia nesimachus nesiotus</i> Fruhstorfer		○	○	○
	イチモンジチョウ	<i>Ladoga camilla japonica</i> Ménétrières	○	○	○	○
	アサマイチモンジ	<i>Ladoga glorifica</i> (Fruhstorfer)	○	○	○	
	コミスジ	<i>Neptis sappho intermedia</i> Pryer	○	○	○	○
	ホシミスジ	<i>Neptis pryeri pryeri</i> Butler				□*1

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
(タテハチョウ科)	ミスジチョウ	<i>Neptis philyra excellens</i> Butler	○	○	○	○
	オオミスジ	<i>Neptis alwina kaempferi</i> de l'Orza		○	○	○
	コムラサキ	<i>Apatura metis substitute</i> Butler	○	○	○	○
	オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i> (Hewitson)	○	○	○	○
	ゴマダラチョウ	<i>Hestina persimilis japonica</i> (C. & R. Felder)	○	○		
	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus argus</i> Butler	○	○	○	○
	ジャノメチョウ	<i>Minois dryas bipunctata</i> (Motschuksky)	○	○	○	
	ウラジャノメ	<i>Lopinga achine achinoides</i> (Butler)				○
	ツマジロウラジャノメ	<i>Lasiommata deidamia</i> <i>interrupta</i> (Fruhstorfer)				○
	ヒメキマダラヒカゲ	<i>Zophoessa callipteris</i> (Butler)				○
	クロヒカゲ	<i>Lethe diana diana</i> (Butler)	○	○	○	○
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i> (Hewitson)	○	○	○	○
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i> (Ménétriès)	○	○	○	○
	ヤマキマダラヒカゲ	<i>Neope nipponica nipponica</i> Butler	○	○	○	○
	オオヒカゲ	<i>Ninguta schrenckii</i> <i>schrenckii</i> (Ménétriès)	○	○	○	
	ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama fulginia</i> Fruhstorfer	○	○	○	○
	コジャノメ	<i>Mycalesis francisca perdiccas</i> Hewitson	○	○	○	○
	ウスイロコノマチョウ	<i>Melanitis leda leda</i> (Linnaeus)		○		
	クロコノマチョウ	<i>Melanitis phedima oitensis</i> Matsumura				□*2
	セセリチョウ科	アオバセセリ	<i>Choaspes benjaminii japonica</i> (Murray)	○	○	○
キバネセセリ		<i>Burara aquilina chrysaeglia</i> (Butler)			○	○
ダイミョウセセリ		<i>Daimio tethys tethys</i> (Ménétriès)	○	○	○	
ミヤマセセリ		<i>Erynnis montanus montanus</i> (Bremer)	○	○	○	○

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
(セセリチョウ科)	ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i> (Bremer & Grey)		○	○	○
	ホソバセセリ	<i>Isotheon lamprospilus lamprospilus</i> C. & R. Felder		○	○	
	ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus inachus</i> (Ménétrières)			○	
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i> (Murray)	○	○	○	○
	スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus leoninus</i> (Butler)		○	○	
	ヘリグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus sylvaticus sylvaticus</i> (Bremer)			○	○
	ヒメキマダラセセリ	<i>Ochlodes ochraceus</i> (Bremer)	○	○	○	○
	コキマダラセセリ	<i>Ochlodes venatus venatus</i> (Bremer & Grey)			○	○
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus flavus</i> (Murray)	○	○	○	○
	オオチャバネセセリ	<i>Polytremis pellucida pellucida</i> (Murray)		○	○	○
	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)		○	○	
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias oberthuri</i> Evans		○		
	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata guttata</i> (Bremer & Grey)	○			

【参考文献・引用文献】

※目録に引用した文献は、末尾に*を付している。

- 青木利之, 1975. 西那須野町の蝶数種の記録. インセクト, 26(2):27-28.
- 藤井満, 1974. 県北における蝶採集記録. インセクト, 25(2):24.
- 藤井満, 1975. 県北における蝶数種の記録. インセクト, 26(1):37.
- 藤井満, 1977. 県北の蝶数種の記録. インセクト, 28(1):27.
- 環境省, 2007. 昆虫類レッドリスト. 絶滅危惧種情報, 環境省ホームページ.
- 久保田博・佐藤光一, 2006. 栃木県における蝶数種の記録. インセクト, 57(1):74.
- 佐藤光一, 1998. 6 チョウ目・チョウ類. 黒磯市動植物実態調査研究会(編). 黒磯市動植物実態調査報告書. 黒磯市動植物実態調査研究会, pp. 334-350.
- 新・栃木県の蝶編集委員会, 2000. 新・栃木県の蝶. 昆虫愛好会, 291pp. *1
- 高橋滋, 2001. 栃木県の蝶, 1種増えた!. インセクト, 52(1):64.
- 高橋滋, 2003. 鱗翅目 Lepidoptera (蝶類). 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの昆虫 I. 栃木県林務部自然環境課, pp. 416-447. *2
- 田中正・浅野勝司・下司昌一・関口洋一・樋口弘道・渡辺一, 1963. 栃木県の蝶. 昆虫愛好会. インセクト, 14(1):1-56. *3
- 栃木県の蝶編纂委員会, 1975. 栃木県の蝶. 昆虫愛好会, 205pp. *4
- 栃木県林務部自然環境課・栃木県立博物館編, 2005. レッドデータブックとちぎ. 栃木県, 898pp.
- 渡辺剛, 2001. 栃木県におけるウスバシロチョウの分布. インセクト, 52(2):18-26.
- 渡辺剛, 2004. 栃木県から確認されたオオモンシロチョウ. インセクト, 55(1):8.
- 渡辺剛, 2005. 旧西那須野町の蝶類相—その30年の変遷—. 那須野が原博物館紀要 創刊号, 1-10.
- 山村剛, 1974. 西那須野町でムモンアカシジミ. インセクト, 25(2):24.
- 山村剛, 1975 a. 県北の蝶数種の記録. インセクト, 26(1):37.
- 山村剛, 1975 b. 西那須野町の蝶類 (追加). インセクト, 26(2):26-27.
- 山村剛, 1984. 那須扇状地とその北部山麓地のミドリシジミ類 —その分布・発生期・食性解明へのアプローチ—. 西那須野町郷土資料館紀要 第一号, 7-30.
- 山村剛, 1991. 西那須野町のチョウ. 西那須野町史編さん委員会(編). 西那須野町の自然 西那須野町史双書 1, pp. 207-224.
- 山村剛・山本賢治, 1997. 栃木県東部のゼフィルス—平地・低山地を中心に—. インセクト, 48(1):1-8.
- 山中隆寛, 2005. ぼくと昆虫. インセクト, 56(2):i.
- 矢田脩監修, 2007. 新訂 原色昆虫大圖鑑 第I巻 (蝶・蛾篇). 北隆館, pp. 1-161.